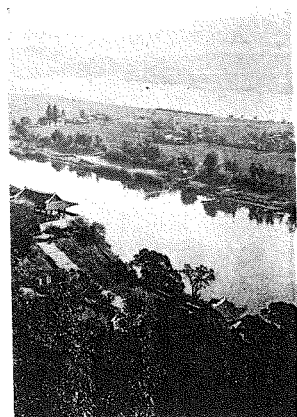


(13) Botan-Dai(Peony Point) in Heijio. Famous Place For Its Glorious History.



(14) An Another View From Same Spot.

初 め て  
朝鮮を見る  
京城に於ける  
帝國鐵道協會  
第二十四回  
總會に列して

一 記 者

第十二信 去らば朝鮮よ……1

京城でもまだ見たい處もあつたが、五月二十五日限りで愈々切り上る事にした、二十五日は早朝驛前の二見旅館を出て京城府廳と朝鮮總督府と龍山の朝鮮鐵道局を訪ねた。

民間方面は朝鮮水電會社と朝鮮土木建築業協會を訪ねたのみであつた。

個人的には市内視察の際又は各所の宴會で夫々會談した人々もあつたので、二十五日は單に役所氣分を味ふべく馳け廻つた丈である元來役所廻りなご云ふ事は私の好みぬ處であるが、又一面には可成りの話相手を得る事もあるので好奇心を以つて時々出掛ける、談論風發なご云ふ様な人は割合に少いが、技術的に含蓄ある常識的意見を求めるにはやつぱり役所の方が良い。

朝鮮では役所めぐりも極く短時間で意見なき聞くひまも何も無かつたが、其短い會見が却つて長い印象を残す事となつた。

第十三信 去らば朝鮮よ……2

私達は京城滞在中は毎日團體的にキレイナ處ばかり見せられたので、如何にも朝鮮の文化が進んでる様に見られた。例へば京城驛の堂々たる建築、之は東京驛に次ぐ立派なもので、朝鮮總督府の建築はさすがに數百萬圓

をかを投じたご言はれる丈に今の處では内地にも見られぬ位の立派なものである、恰度其建築は明治神宮外苑の聖徳記念繪畫館を思出す様な壯觀である。

京城府廳舎でさへ東京市廳舎なき、比へものにならぬものである、其他郵便局なきが又何れも堂々たる建築で、内地にも見られぬものである。銀行やホテルも之に匹敵してをるに拘はらず民間の建築物は餘りに振はない。

京城の道路も停車場前の廣場からズツト電車のある大通りは簡易舗装がしてあるので、雨でも歩行に困る様な事はない、此の舗装はターマカダムであるが、最近の工費を聞くご面坪當り14圓乃至18圓で出來たごの事である然し處々に凹みが出來てをるから補修費も相當にかゝるごの事である。

京城驛に下車した第一印象は此の廣い道路が舗装されてをる事が何よりの好感であつた。

京城に来て朝鮮氣分のしない事も又此等の文化的な施設が行届いてをるからである、が然し足一度び裡通りに入るご其所には朝鮮氣分が猛烈に曝露されてをるのに一驚を喫するそれは不潔な遊惰な嗜博ごである。人情の點

に至つては東洋同一種族の我等に大して變りは無い事と思ふ。

第十四信 去らば朝鮮よ……3

二十五日迄旅館に残つた人は少い、多くは二十四日の晩に各方面視察團として出發した同宿の稻垣兵太郎氏は先般鐵道省第二改良事務所長を退職した鐵道工事界の老功者であるが、京城に來て氏の臺灣時代の工事世間話を聞いたのも奇縁であつた。

直木博士なきからも一寸視察談を聞いたが何れも忙しい會見であつた。

二十五日午後九時發の汽車で京城を發つのであるが、驛の直ぐ前に在る旅館だから急ぐ事はない、入浴して、來訪した知人ら俱に晩

此所は談話室で船首に近いから機關の振動は殆んぞ來ない、中央から船尾に近い二等室や三等室は機關の振動丈でさへ可成りに不快な感じである。

いつも談論風發の諸君も釜山から乗船して此の好時の海上を親しみもせず一等客の多くはベッドに寝轉び切り、二等客も殆んぞ總て廣間に寝轉んでをる、談話するもの、讀書するもの殆んぞ二、三組にすぎない。

船は先程伊岐、對馬を右手に見てをつたがもうそれも見えない、一路白波を蹴つて下關に進んでをる、此の邊は日本の興廢を決した彼の日露大海戰のあつた處で、同船者の中には遙かな島影を指してあの邊からバルチック



餐をすましてのつくり出掛けた。

京城驛には鐵道協會員で同車する人が三十人もあつた。

十數年前に私は農商務省から朝鮮産業調査書云ふ大冊な本を借りて朝鮮事情を研究して以來、朝鮮産業開發に關して大なる興味を感じてをつた、某先輩は私の立案を實行した人もある。此の思出の朝鮮よ……初めて朝鮮を見て、僅かに四日間のあはたゞしい旅、旅云ふ程に孤獨を感じない旅行を終る事となつた。

私の夢は釜山行の寢臺車の中で、去らば朝鮮よ……

第十五信 波のうへ……1

波のうねりは陸から見てこそ面白いが、船に乗つた身には有難くないものだ、私は今關釜連絡船の卓上で筆を走らしてをるが、天氣晴期で風も少いが、船は可成り揺れてをる、

艦隊が現れた、我が東郷艦隊が斯う出て敵艦の進路を横斷しつゝ、斯う云ふ風に砲彈を集中した……さ手に取る如く説明してくれる。

仁川港外でも海戰の説明を聞いたが、昔語りとして聞くには餘りに尊い同胞の努力であつた。

五月二十六日午後四時二十五分波のうねりは益々強い船の揺れもまして來た、あま一時半で下關に着く、私の卓も動搖して來た一時ペンを休める。(連絡船中にて岡崎生)

前頁寫眞説明

(13) 歴史に名高い平壤牡丹臺

(14) 同上

鐵道協會總會の一員として朝鮮紀行のあわたゞしい旅を無事に終りました事を感謝します。(岡崎生)